



東京女子医科大学学術リポジトリ
<https://twinkle.repo.nii.ac.jp>



チュートリアル課題 予定日過ぎても生まれない

著者名	東京女子医科大学
雑誌名	チュートリアル課題
巻	2016
号	S7
発行年	2016-04-28
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032702

2016年度 Segment. 7

課 題 No.3

課題名：予定日過ぎても生まれない

課題作成者：産婦人科学
母子総合医療センター

小川正樹
戸津五月



無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意ください。

シート1

会社員の佐藤文子さん（32歳）は、結婚して初めての妊娠でとても喜んでいました。糖尿病を患っているご両親も、初孫の出産を心待ちにしているようで、毎日のように電話をかけてきては、「いつ生まれるの？」と聞いてきます。しかし、1週間前の出産予定日を過ぎても、生まれるような気配はありません。

今日は41週0日で妊婦健康診査のため病院を受診しました。産婦人科の先生から、「少し赤ちゃんのお湯である羊水の量が少ないようですね、またちょっと赤ちゃんの体重も大きめですね。」と言われ、「明日、入院してお産にしましょう。」と言われました。

シート2

文子さんは、入院当日の朝、鈍いお腹の痛みと、腰の痛みを覚えて目が覚めました。その痛みは30分毎に規則的に感じられました。さらに尿意を感じてトイレに行ったところ、真っ赤な水っぽい粘液が流れてきました。急いで病院に向かい入院の手続きを取りました。入院後には、産科の先生から「すでに破水していて、羊水も黒っぽく混濁していますし、分娩が始まっているようだね」と言われ、「ただ、陣痛が弱いようなので、陣痛促進剤で分娩を促進しましょう」と言われました。

シート3

子宮口が全開大し、すでに2時間が経過しています。文子さんは、2分おきに規則的に陣痛を感じますが、赤ちゃんはなかなか生まれません。そのとき突然に、胎児心拍数陣痛モニタリングを見ていた産婦人科の先生が、「赤ちゃんが苦しんでいるようなので、これから吸引分娩にします。」と言うと、吸引カップを赤ちゃんの頭につけて引っ張りました。幸い、赤ちゃんの頭は出たようです。でも、分娩を介助していた助産師さんが「先生！赤ちゃんの肩が出ません」と言っているのが聞こえます。横にいた産科の先生から膝を曲げられ、恥骨の上を突然押され、ありったけの力でいきんでみたら、やっと赤ちゃんが生まれたようです。3700gの男の子でした。でも、泣き声が聞こえませんでした。

シート4

佐藤文子さんは、吸引分娩で赤ちゃんを分娩しました。

在胎期間41週1日、出生体重3700gの男の子でした。

分娩には新生児科の先生も立ち会い、出生後すぐに蘇生を開始しました。

生後1分では、呼吸は不規則で啼泣はみられませんでした。心拍数は120回/分、手足は少し曲げていました。口腔内を吸引したら、顔をしかめました。全身チアノーゼでした。

生後5分では、呼吸は不規則で、時々啼泣がみられました。心拍数は170回/分、手足は少し曲げていました。口腔内の吸引では咳込みました。体幹はピンク色ですが、手足にはチアノーゼがみられました。

搬送用保育器内に酸素を投与しながら、NICUに搬送しました。

シート5

赤ちゃんはNICUに入院しました。

体温 36.9℃、呼吸数 75回/分、心拍数 170回/分、血圧 60/35mmHg、室内気でSpO₂ 89%でした。

赤ちゃんは苦しそうで、ヴーヴーと唸っており、呼吸のたびに肋間がペコペコへこんでいます。

聴診では前胸部でcoarse cracklesを聴取しました。

シート6

口腔内を吸引したら、緑色の胎便が多量にひかれました。保育器内に酸素30%を投与し、SpO₂は97%となりました。また、ブドウ糖の点滴を開始しました。陥没呼吸は続いているますが、呻吟は消失しました。

生後4時間、啼泣のあとに、突然、陥没呼吸が強くなり、SpO₂が75%に低下しました。

シート7

人工呼吸管理が開始されました。また、緊張性気胸に対し、左胸腔ドレナージを行っています。翌日になって、全身状態は徐々に改善してきました。しかし、お母さんの文子さんは、生まれたときから入院している赤ちゃんに対して、不安な気持ちでいっぱいです。